

昭和の香る味な街・中央通り

その地域を愛するという

愛情が街の活性化に



山形県・高畠町
高畠中央通り協同組合
専務理事
古川 和夫氏

高畠町は農、工、商のバランスが取れていまして、農業は主に米、ブドウ、ラフランス、あるいは酪農。酪農もどちらかと言いますと、搾乳のほうですね。工業は、岡村製作所という家具メーカーさん、あるいは小森製作所というお札を印刷する印刷機械を作る企業、他にIT関連企業等、割合バランスが取れている町ではないかと思っています。

その中で、私ども商業は今まで楽な商売をしていたのですが、米沢市等近隣に大型店がどんどん入って来ている状況です。高畠町にもワンフロアで7,000坪のスーパーセンターの進出が計画されています。

それで私たちの所は、高畠中央通り商店街という通りでして、東西1キロの所に40数店舗、それも飲食店が入っています。ですから、商店街活動というよりは、地域づくり、街づくりという観点で、私たちは県、町、商工会、観光協会、地域の住民の皆さんと一緒に街づくりをしています。その1つのコンセプトとして、昭和30年代を切り口にしてやっていこうじゃないかということで、今、取り組んでいるところです。

第4回クラシックカー レビュー イン 高畠2004

去る10月17日の日曜日に通りの1キロを全部通行止めにして、全国からクラシックカー126台に参加していただき「クラシックカー レビュー イン 高畠」を開催しました。このイベントは1年おきに開催しています。彼らは参加費5,000円を払い、他に宿泊費、前夜祭の参加費を払い、車を自走してくるのです。私たちがやるのは、お土産をあげるだけです。

ただしコマース料はかかります。ト

ータル300万円の予算ですが、町、商工会からの助成が120万円で残りの180万円は全部我々の仲間と協賛企業の寄付で賄いました。地元の山形新聞への全面広告も地元の企業が出してくれました。

そしてありがたいことに、イベントの当日私達は本部に行きません。我々は店で金儲けをしています。誰がやっているのかといくと、青年会議所、商工会青年部、女性部、交通安全協会の方々がやってくれるんです。でも準備と後片付けは全部我々がやりました。これがなぜできたかといくと、今までの積み上げがあったからだと私は、自負しております。

花の散歩道づくり

私達は「花の散歩道」というネーミングで通りの整備を図りました。これは、平成4年にベニバナ国体があって私達の町も軟式野球の会場になりました。それで、「お前達の通りも少し汚いから、花でも並べろ」ということで、プランターが150個来たんですね。しかし、行政の方にはたいへん申し訳ないのですが、行政の縦割りの悪いところが出たんです。建設課からは、町内会の区長さんにプランターが、商工観光課からは私達に、社会教育のほうからは老人会に来たんです。プランターが地域毎にバラバラなんです。通りには6つの町内会がありますが、各町内会の区長さん、老人会の会長さんをお願いをしまして、私達の通りに150個のプランター全部を集めたのです。

私達の通りは今では町道なんですけど、以前は国道113号線で、道幅が11メートルあり、道路の両側全部にガードレールがあるんです。ガードレールの車道側にはプランターが置けませんから、歩道に置きます。すると、ガードレールが壁にな

りプランターの花が車からは見えないんです。歩道のほうでもプランターが邪魔になるんです。

そこで、ガードレールには横に丸棒が3本あるのですが、町にお願いをしまして横棒を実験的に2本取らせていただいたのです。ついでにガードレールは白色ですが、落ち着いた茶系の色に塗り替えてしまったのです。そして、ガードレールの横棒を取ったところにプランターを置いたんです。そうしますと、車道と歩道に少し出ますが、交通には支障がないんですね。

これで景観的に改善され、私達の1キロの道路全部をプランターの花でいっぱいにしようということで、平成5年には町内会の区長さん、老人会の会長さんをお願いをしまして、「中央通り花と緑の会」という会をつくったんです。そうするとプランターが600個必要になって、国体会場の野球場の周辺からと、県・町から支援していただき全部で600個集めることが出来ました。

私達の商店は40数軒しかありませんから、地域の皆さん方が応援をしてくれプランターに花を植えてくれました。花の苗にしてパンジーが4,500本。これは町のほうから現物で支給していただきました。

そして、通りが花でいっぱいになりましたら、子供たちが書いた作文の中に「街がきれいになったら、私たちも大人になったら町に残りたいと思います」、「僕も花植えを手伝った。花は植えると終わりだと思った。だけどおばあちゃんが旅行に行くので3日間水掛けをやってくれと頼まれた。僕は学校に行く前と帰ってから3日間水掛けをやった。大人の人は、こういう大変なことを毎日やって、僕たちの通学路をきれいにしてくれる。だから、僕たちも道路を汚さないようにしましょう」と

いうものがありました。そして、今、高畠一中の3年生が小学校5年生のときに、NHKの「プロジェクトX」を真似て「プロジェクト530」という運動をしてくれました。「ゴミゼロ運動」ですね。彼らは学校帰りに自分たちの通学路のゴミを拾ったり、休みの時は公共施設のゴミを拾ったりして活躍してくれました。町をきれいにすれば、「プロジェクト530」のように子供たちに確実に伝わることを確信しました。

自然の素材で看板づくり

花を植えますと一番目立ったのが通りの汚さだったんです。自販機の脇のゴミ箱が空缶で溢れていたり、店の前に自転車が置きっぱなしであったり一番目立ったのは電化製品、化粧品、酒の看板等の袖看板なんです。我が「まほろばの里」といわれる高畠町には相応しくないのではないかとということで袖看板を取ってしまっ、自然の素材で看板を作ろうということになりました。

我々の通りの仲間に趣味で木で看板を作っているのが居りまして、我々も自分で看板を作ろうということになりました。そして、ありがたいことに商工会で50万円の予算を3年間出してくれましたから、1店に3万円ずつ補てんをしまして、ケヤキの木に自分の店の特色を表す絵文字をいれて木製の看板づくりをしました。（写真2）

カッパ伝説が縁～遠野との交流

次に、高畠は凝灰岩の産地なんです。近くの石屋さんに県展などに石の彫刻を出す方がいるんです。私はその方を小さいときから知っているものですから、「兼ちゃん、うちの通りにも石でモニュメントを創ってほしい」とお願いしましたところ、高畠は、「泣いた赤鬼」などで有名な童話作家の浜田広介先生の出身地ですので、広介童話の主人公のモニュメントを通りに創ってくれたのです。今現在10点あります。これは全部タダで寄付してくれました。「お前達は、街づくりを一生懸命にやっているから、俺も寄付しましょう」と言ってくれました。

これはちょっと余談になりますが、岩

手県遠野市のカッパの石像は、“兼ちゃん”が創ったものですが、山形新幹線の高畠駅長さんが気を利かせてくれて縁結びをしてくれたんです。高畠には最上川が流れていまして、やはりカッパ伝説があるんです。遠野もカッパ伝説。それで、高畠の駅前に雄のカッパの石像があったので、遠野市からお嫁さんを新幹線で迎えて、駅前で結婚式を挙げたんです。そして次の年、子どもカッパが3人というのか、3匹というのか生まれまして、トラックにカッパの親子5人(?)を乗せて、町長さんをはじめみんなで里帰りをして、遠野市の秋まつりに一緒に参加したんです。それで長女を遠野市に置いてきたんです。長男と次男は高畠に親子であります。そういうことが縁結びになっています。そのときに、街づくりとは、仕掛け次第だとつくづく感じました。

昭和ミニ資料館

いつ来ても遊べる施設ということで、私たちは昭和30年代をテーマとした当時の日用雑貨、生活用品を集めて、『昭和ミニ資料館』というのを創ったんです。最初は、1号館から6号館まで、5館造った(4号館は欠番)。それも、店の中のほんの小さな、3尺くらいのスペースに様々なガラクタを集めて並べたんです。

これらの資料館の一部を紹介すると、1号館は時計、メガネ、CDを売っている店ですが、古い時計とかテープレコーダーとか飾ってあります。古い時計が20数個あります。2号館は、県の民芸協会の会長さんが寄付してくれた鋸の資料館と奥さんが高校3年生のときに東京オリンピックの女子陸上200メートルに出場しましたので、当時のオリンピックの品々が飾ってあります。3号館は、隣の空き店舗と中でつないで、喫茶店と資料館にしました。昭和30年代の映画のポスターがおおよそ500枚くらいあります。

7号館は床屋さんだったんですが、店のおばあちゃんが床屋さんをやめたから、ここを無料で借りて「昭和小学校・中央通り分校」という資料館にしました。

6号館は店内に「スクリーン」という当時の映画の本とか、当時の漫画本が見れるようにしてあります。「スクリーン」は



(写真2)花を飾ると汚いところが目立つようになり、袖看板を取って業種に合った個性豊かな木の看板を手作りで設置。

昭和30年代、40年代のものが全部あるんです。こうした資料館が現在では19館あります。(写真3)

ところが、その発想がおもしろいというので、NHKから「東北ふるさと賞」という賞をいただいて、NHKでも全国放送してくれましたので、商店街を創っているというイメージになっちゃったんです。このようにマスコミがアピールしてくれましたから、視察の方が多くお見えになったんです。極端な話、月曜日から金曜日まで毎日なんです。

中央通り金メダル獲得大作戦

私たちは、平成9年から毎週土曜日朝10時から正午まで朝市をやっております。今は「ふれあい市」といっているんですが、「ふれあい市」と昭和ミニ資料館の連動性が出てきました。

「ふれあい市」に単に出品するだけじゃなく目標を作ろうとしております。私も5年ほど前から“手打ちそば”を店内で出しておりますが、私たちは『中央通り金メダル獲得大作戦』というテーマで、1店逸品運動やっています。銀や銅ですと、地域の人は来ますけれども、遠くからは来ないんです。商圈を拡げなければいけない。そのためには、やっぱり金メダルでないといけない。ということで、『金メダル獲得大作戦』を展開しているんです。

そのこだわりはなにか。まず地元のもの

(写真3)昭和30年代の映画のポスターが飾ってある昭和ミニ劇場(昭和3号館・喫茶店)の店内。



のにこだわるということ。それから健康にいいもの。環境に優しいもの。それから手づくりということです。

例えば、うちの通りに肉屋さんがあります。5年程前、店を建て替えるときに、メインは牛肉なのですが、外から窓越しに餃子作りが見えるようにしたんです。餃子は1個60円ですから、売り上げは高々知れています。牛肉のほうがはるかにいい。ですが、その餃子があることよってフリー客が店に入るんですよ。

通りのだんご屋さんも、道路拡幅に引っ掛かったので店舗改装したんですね。以前は奥で団子を作っていたんですが、いまいち売れ行きがよくなかった。今は外から見える店頭で団子を作っています。すると、爆発的に売れますね。人が汗をかいている姿を見て、お客さんが引き付けられるんです。人を呼ぶのは物じゃない。人じゃないか。人が汗をかいている。あの人の情熱、あの人の作ったもの、それが伝われば人が来る。そういうことが街づくりの原点ではないかと、私は思います。

サポーターを増やせ

これらの事業を実現化するのに、13年くらいかかってますけれども、1つはやっぱり地域の人たちのやる気じゃないかと思ひます。ただ、地域のやる気だけではできません。やはり行政、商工会、それらの協力がないとできません。

私達は、昭和30年代の街づくりをやりたかったです。そこで、私達と商工会とで「中央通りのビジョン」をつくりました。これを持って私達の通りの役員と商工会の会長さんと、町長さんに行きました。「私達はこういう街づくりをしたいので、何とか協力をお願いいたします」と。後にも先にも町役場に陳情に行ったのは、この1回だけなんです。あとは全部商工会の事業の中でやっています。

それからもっと大きいのは、人との交流じゃないかと思ひます。それ他所の人です。地元の人だけだと見えないものがあるんですが、他所から来ていただいた方は、いろいろなものを見てくれます。ですから、私達はできるだけ他所から来た方と交流するんです。時には、私の一存で、私達の役員会などにも、おもしろい人が来るとすぐに入ってもらいます。「一緒に酒を呑みましょう」ということで、公民館などでやるんです。

そうやって他所の人と交流することが、結果的に私達の店の活性化につながると思ひます。「今はどこに行っても大変だよ。だけどお前たち、よくがんばっているね」と勇気づけられます。また、次のパワーになると思ひます。そして彼らが応援団になってくれます。

サッカーもそうですよね。「サポーターを増やせ!」と言ひますよね。なぜならば、サポーターは試合を観にいくとき、1人では行きませんよね。必ず仲間がいます。仲間がお客さんなんです。

平成9年の1月、キャンプ前で忙しいのに、元巨人軍監督の長嶋さんが高畠で講演した際に私達の下駄にサインをしていただいたのです。大きいのと小さいのと。大きいのは大日如来の石仏に飾ろうとしたんですよ。しかし、保存会の方々から「盗まれちゃうからやめておけ」と言われたんです。県知事の下駄はちゃんと飾ってあるんです。盗まれないですね。「長嶋さんのは我々は保証しません」ということで、16号館のガラスケースに入れてあります。私の資料館には長嶋さんが入団したときと、引退したときの本があるのですが、それにも商店街の活動に理解していただきサインしてくれました。

それからタレントのダニエル・カールさ

んには、先程お話しした遠野市のカッパとの縁結びをしたときに、テレビ東京の番組でしたが、カッパの結婚式と私達の商店街の取材に来たんです。そのときに色紙にサインをしていただいたんですが、商店街で使用している包装紙のデザインにこのサインを無料で使わせてもらっています。

街づくりをするということで、みなさん協力してくれるということですね。

これから人を呼ぶというときに、国内の人もそうですが、私はアジアだと思ひます。中国、韓国、台湾、香港、そういった国の方々が視察に来て、そして遊びに来ています。現に東北地方にも中国系の方が何万人もいますよね。そして、向こうは経済が伸びていますから、そういう方の兄弟、友達が遊びに来ます。今、その基盤を作っておく必要があるのではないのでしょうか。

愛情が街を活性化させる

それから、街づくりをすると実績と経験ができます。その中から自分の技が身に付きます。例えば「そば打ち教室をやるよ」「おもしろいね」「一生懸命やるよ」ということで技が身に付きますね。そうすると新しい仕事ができます。看板づくりもそうです。もうあちこちから看板の注文がきますよ。サイドビジネスですよ。しかし、経験しなければだめなんです。背広を着て、ネクタイを締めて、いくら会議をしても街は活性化しませんよ。汗をかくことです。そのことで結果的に新しい仕事生まれるということですね。

そして、最後はその地域を愛するという愛情がなければだめなんじゃないのでしょうか。「俺はこの街が好きだよ。この県が好きだ。この地域が好きだ」このことを子供たちに継がせたい、あるいは地域の人にわかってほしいという愛情があるか、情熱があるかということではないのでしょうか。それが最終的にいい街をつくれるかどうかにか繋がるのではないかと思います。

(この講演録は、去る'04年10月21日に開催された中心市街地活性化研究会から誌面の関係上内容を抜粋し、掲載したものです。)